
めだかボックス ~ From despair to hope ~

じーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックス 〈From despair to hope〉

【Nコード】

N8354X

【作者名】

じーく

【あらすじ】

少年は幸福だった・・・

幸せで・・・毎日が光で満ちていた。

だが・・・それは一瞬で奪われた・・・

心を一気にへし折られたんだ。

もう・・・彼には何も残らないのか・・・？

絶望だけが彼の心を支配する・・・

- そんな苦痛な毎日だったが・・・ある時真っ白な空間で目覚めて・・・

Prologue (前書き)

好きな漫画の1つです・・・
ちよこつと書いてみたら・・・

結構創作意欲が出てしまいました・・・
他の作品もこの作品もガンバリマスので 暖かい目をお願いします
苦笑

Prologue

僕は・・・好きだった女性がいた・・・

幼いころから知っていて・・・共に遊び笑い涙を流し・・・

何をするのにも一緒だった。

それは歳をとっても変わらないものだった。

そして・・・僕たちは・・・幼馴染の関係から恋人になったんだ・・・

家族はみんな「やっぱりな!」とか「おそーい!」とか言って冷やかしてはいたが、

とても暖かい目で見ていてくれた。

こんなに幸せな事ってあるのだろうか・・・? あっていいのだろうか?

そこまで考えてしまつほどに・・・ 幸せだったんだ・・・

そんな日にはもう・・・

二度と戻れない・・・・・・・・・・・・・・・・

They are all the beginnings for
om here・・・・・・・・・・
《ここから 全ては始まった・・・・・・・・》

「ん・・・・・・・・ じじは・・・・・・・・？」

目が覚めると・・・・・・・・ ここは何も無い空間。

唯・・・・ 言葉で表現すると、真っ白で何も無い空間。

地面があるのかも分からない、実際に立っているのかも分からない。

「あ……あれ？体が……」

自分の姿が…… 無いのだ。

「よう……」

そこへ…… 1人の男が近付いてきた。

「……だれ？」

慌てるわけでもなく……警戒するわけでもない。

唯……乾いた言葉で話す。

もう何の感情も籠っていない。

全てどうでもいいかの様な……

そんな声だ。

「……なるほどなあ…… お前……んな事があつたのか……
そりゃあ 心の1つや2つ壊れちまっても不思議じゃないな人間
つてのは脆いからな……」

目を見ただけで・・・その男は全てを理解したようだ・・・

「だからなんなの？ 君は・・・誰？ それにここは？」

気になるセリフはあった・・・「人間つてのは脆い」・・・だ。

だが・・・一瞬だけ考えたが、直ぐに考えるのを止め、いつもの表情に戻る。

「お前みたいな人間・・・オレは沢山見てきた。大体は同じなんだけどな・・・違うところがある。人は・・・死んじまったら・・・その魂は浄化され・・・全て忘れるんだ。だが・・・お前さんは・・・死しても尚・・・覚えてるんだな。」

ああ・・・やっぱりそうか、

男の話聞き、理解した。

《僕は死んだのだと・・・》

「理解したようだな・・・」

また目を見て感じ取ったのか、男はそう呟いた。

「はい・・・もうどうでもいいです。僕を・・・早く連れて行ってください・・・もう何も・・・残ってませんから・・・」

そう呟いた。

男は本当に・・・心の底からそう言っていると感じていた。

「・・・ふふふ オレはおまえに興味が湧いたぜえ。」

男からは意外な言葉が帰ってくる。

「興味・・・？」

「そう・・・興味・・・だ。変な意味じゃないぜ。さっきも言ったが、ここに来る奴らはほぼ全員・・・記憶なんか全部消えている。当然だ。ここは所謂体と魂が離れ・・・浄化されたものがここにくるんだ。だが、お前さんは魂となっても・・・その深い悲しみを忘れていない・・・忘れられてない。異常なまてにな。」

ということらしい・・・

僕は結局何が言いたいのがよく分からなかった。

その次に出てきた言葉に更に驚いた。

「お前・・・もう一度・・・違う人生を歩んでみないか？」

所謂・・・生まれ変わりという奴だろう・・・か？

「いえ・・・僕は疲れきってます・・・生まれ変わらなくてもいいんです・・・このまま消えてい来たいんです・・・」

その提案を拒否した。

すると

「今のお前は絶望のどん底だろ？」

また脈絡もあまり無い話が始まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして・・・ 生きたいとも思えない・・・なぜなら 絶望だから。魂が歪んでえしまうほどに・・・」

回答を聞く前に・・・男は続けた。

「そんなお前に凶報だ・・・ お前はそのままだと悠久の時・・・ 早い話このままだと、これから永遠にその苦悩を味わう事になる」

ピクン！！

その言葉に強く反応した・・・

この苦しみが永遠に・・・？

信じられないといった感じだ。

「信じられないと思うが、間違いない。それが証拠に・・・見る。」

そう言っつて男が手を翳した先を見てみると・・・

それは・・・見たことあるような・・・無いような・・・そんなとても・・・デカイ町だ。

「これは・・・？」

見たことあるような気がするけど・・・

疑問だった。

疑問に思つことなど・・・何かかなり久しぶりのような気がする・・・

「見たことある・・・よな？ 当然だ。ここはお前が暮らしていた場所。ただ・・・100年後になるがな・・・」

「ひゃっ・・・100年・・・？」

「ああそつだ・・・ほら、町の空に日付がふつてあるだろう？どんな技術かは興味ないんで知らんが、日付が2114年になってんだろ？」

男が指した方を凝視する・・・

間違いない・・・日付は大体100年後だ。

仕掛けにしては凄すぎる。

自分の体が見えないのにこの場にいる変な感覚もそつだし、

トリックで出来る事ではなかった。

「信じるか・・・？いや信じざるをえないだろうな。そう・・・お前さんが死んでもう100年になる。それでも・・・お前は記憶を保持しているそれも鮮明にな。」

確かにそうだった。

あの・・・大切なものを失った痛みは・・・まだ心にズキリツツと傷を抉るように健在だ、

「時と共に風化する・・・なんて次元じゃねえんだお前の場合。だからお前に興味を持ったんだよ。人に興味を持つなんて、何千年ぶりかなあ・・・？」

途方もない事を言っている・・・

何千年って・・・

「こんな苦痛ずっと受けるなんて・・・嫌じゃねえか？お前さんもさ。」

そう言い再び近付いてきた。

「・・・・・・・・・・」

沈黙・・・

「今回は迷ってんな。」

この人に隠し事は無理なんだろう。

確かに僕は迷っている。

迷うなんて・・・凄く久しぶりのような気がする。

「1つ・・・教えてください。」

聞きたい事があったんだ。

「ん？なんだ？」

「唯の興味本位名だけで・・・貴方は僕にこんなに気にかけてくれているんですか？他に理由は無いんですか？」

確かにもっともな疑問だ。

唯のお人よしって感じはしない。

「まあ そう感じても無理ねえな・・・ まあマジで興味が湧いたつてのはマジなんだ、そして・・・もう1つ」

そう言つて男は穏やかな顔になる。

「さつき何千年ぶりかつて言つたけどあれは実は嘘・・・だったな 実はお前さんより早めに来たお嬢さんが、お前のことを頼むつて言つててさ。」

ドクンッ・・・

心臓などもう無いはずなのに・・・胸が高鳴つたような感覚がした。

「私は大丈夫だから・・・貴方に生きている間に幸せをたくさん貰つたからつて・・・ でも・・・お前の性格を完全に知り尽くしているからかな・・・ お前がここまで追い詰められるのも読めてた

みたいなんだわ。全く・・・こんな人間にほとんど同時に2人にあえるとはな・・・」

オレにとつたら1000年なんてあっという間だ、

転寝したら・・・1000年たってたなんてざらだし。

「・・・か・・・かのじよが・・・？」

涙なんかでないはずなのに・・・泣いている感覚が今度はしていた。

「そつだ・・・お前がここでこれ以上しよげていると彼女・・・うばれないみたいなんだわ。お前さんの心の傷を完全に癒して・・・もう一回天寿を全うしないと、今のような魂の牢獄に閉じ込められたまんまになるんだぜ。そんなのは嫌だろ？」

・・・

「まあ　そういうことだ。生まれ変わらしてやることはできないが・・・別の二次元へ転生してやる事はできるんだわ。そつちなら何とかな・・・　実在しない思いの世界だから干渉しやすいんだ。」

二次元・・・世界・・・か・・・

「彼女が好きだった世界にじげんが合ったよな・・・確か。」

何かを思い出していた。

「・・・たしか・・・あれは【めだかボックス】だった・・・　正

しすぎる主人公に惹かれて・・・何度も一緒に・・・立ち読みしたり・・・してたっけ・・・」

昔を思い出すように・・・そう呟いた。

どこことなく・・・彼女と主人公は似てたんだよなあ・・・

決して折れない心とか・・・人望があったりとか・・・正しすぎるような感じもさ・・・さすがに漫画的なパラメーターはないけど。

「・・・そいつで決定でいいか？」

また・・・心読まれちゃった。

「うん・・・彼女との・・・思い出の漫画だからね・・・今の僕は・・・まだ立ち直れそうにない・・・1人でずっといたって絶対に考え込んで・・・どうでもいって気持ちになってくる・・・なら・・・彼女が・・・会えなくてもそう言ってくれてたのなら・・・もう一度・・・頑張ってみるよ。僕」

力強く・・・頷いた。

先ほどまでとは・・・比べ物にならないほど・・・生氣は戻っている感じた。死者なのにそんな感じがする・・・

「へへ・・・見違えるほどになったじゃねえか。さっきと比べてな。よしそつちでもう一回頑張ってみな。まあ破天荒で無茶苦茶な登場人物に振り回されるかもしれんがな。頑張つて来いよ。」

そう言つと・・・

白い空間が一面光りだした。

「うわあ・・・なんかキレイだね・・・ あ、そう言えば」

男は思い出したように・・・

話す。

「あの世界は 確か 異能・・・ アブノーマル 異常とか過負荷とか・・・ マイナス 後・・・
なんだっけ？ まあいいや・・・そんなのがあったと思うん
だけど・・・ そんな能力者みたいなのになつたりするの？ 僕も」

男は手を掲げながら言う。

「ああ・・・ ああいう世界はそいつの環境やら性質で能力を持つ
みたいなんだわ。詳しい事は分からないが、間違いなくお前さんは
スキル・ホルダー能力保持者になつてるだろう。後、今は見る影も無くなつてるお前
さんの身体能力だけど、思いの強さで強くも弱くもなるようになつ
てるからな、 しっかり頑張れよ！」

なるほど・・・ 思いの強さか・・・

「確かに今じゃ見る影もないはずだよね・・・ 想つてた大切な人
を失つちやつたんだからさ。」

苦笑する・・・

でも 以前ほど落ち込んではいないみたいだ。

Prologue (後書き)

ちよつと長くなっちゃいましたね・・・
とりあえず・・・

読んでくれた方！ありがとうございます！！

さあ！幸せになるぞ！

苦笑

第1箱 「犬や猫じゃないんだからさあ・・・」 (前書き)

よろしく願います!!

第1箱 「犬や猫じゃないんだからさあ・・・」

あれ・・・

ここは？

「さっきの人は・・・？ いない・・・」

辺りを見渡しても・・・いなかった。

それにさっきの場所と違って、なんだか現実味があるところに来て
って感じた。

体もちゃんとある・・・

「転生？そっか・・・転生したんだ・・・僕・・・あつという間だったな・・・」

そう理解し、改めて周りを確認する。

そこは・・・なにやら狭い箱の中・・・

触ってみると・・・

「これってダンボール箱？」

そうダンボール箱の中だ。

たしかに【めだかボックス】って名前だったけど・・・

ダンボールかあ・・・

っと考えていたら・・・

一枚の紙が置かれていたことに気付いた。

《名前は劉一です。可愛がってあげてください・・・》

の一言・・・

「犬や猫じゃないんだから・・・それに・・・僕・・・スッゴい小さくなってる」

あきれてしまっていた。

それに、まさかこんなに若返るとは・・・ まあまだ10代だったけどね・・・

体が小さいといろいろと不憫な事がありそうだなあ・・・

でも、

「もっと大きな不幸を背負っていたし・・・ 何とも思わないや、これくらいじゃ・・・」

ショックな事などない。

うん・・・普通だ。

まあ それがこの世界で言う・・・《異常》とも取れるのだろうけど。

そして。

記憶を・・・懸命に辿ってみると、

記憶が段々と脳裏に浮かび上がってきた。

ちゃんと、この世界の住人として転生できているようだ。

どうやら生みの親は、僕の異常さに気付いて恐ろしくなり捨てたと
言う事だろう。

人は理解できない者に恐怖する・・・

それは、親とて例外ではなかった。

生まれてきて・・・

教えてもない事を知っている・身体能力が異常に高い。

初めは天才と喜んでいたが・・・それが徐々に恐怖に変わって行っ
たのだろう。

冷静に分析できる・・・

「これが僕の異常性・・・なのかな？ 瞬時に全て理解できる事・・・
・・・？ 記憶力とか・・・？ んー・・・わかんないな・・・」

こちらではあるのか分からないが・・・

サヴァン症候群に類するものなのかな？と思った・・・

「まあ……いや……考えていても分からないしね……」

そう言いつと考えるのをやめた。

幸いな事に気温は低い気がするが、雨は降っていない。

そのため、

暫くその【ボックス】の中でじっと座っていた。

そして。

数十分後……

人が声を掛けてきた。

「あれ!!何これ!!! ええ!!子供が…… 男のコが……
!!」

女のコだ。

女のゴが僕と同じくらいのゴと手を繋いでいた。

兄弟かな？

「ちょっと！！！！ 僕！どうしたの？」

慌てたように聞いてきた。

「僕は・・・捨てられたみたいなんです。」

涙を流すわけでもなく、淡々とした表情で答えた。

その事に少なからず動揺したみたいだ。

捨てられた事をしっかりと理解しているのにこの表情・・・

2〜3歳のゴが・・・

これは放っておけないわね・・・

「そ・・・そつか・・・ よっし！ 君！私たちと一緒に来なさい！
！ こんなところにいると風邪を引いちゃうしね。」

そう言つと・・・手を差し出された。

少し戸惑つたが・・・

手を握つた。

ギュツ・・・

暖かい手だ・・・

ずっと・・・この温もりを・・・忘れていたよつな気がする。

人の温もりを。

すると、自然と涙が零れ落ちていた。

表情はそのままなのだが・・・

握ってくれた女の口はちょっと驚いていたが、

直ぐに笑顔に戻つた。

「・・・よし！すぐそこが私が勤めている病院よ。もうちょっとでつくからね。」

そして軽く涙を拭ってもらった。

「後の口は善吉って言うんだ。仲良くしてあげてね。」

ぜん・・・きち・・・？

そうか・・・この口が、

「うん。よろしくね。善吉くん 僕の名前は劉一だよ。」

そう言って手を差し出す・・・

「うん！・・・よろしくね！りゅうくん！」

迷いなく握ってくれた。

そして・・・この世界に入って彼が・・・

最初の・・・

友達になったんだ。

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」（前書き）

よろしく願います!!

さあ・・・例の子ども達にあっちゃいます。

遭遇率100%でした・・・ 苦笑

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」

暫く歩いていくと、

かなり大きめの病院が見えてきた・・・

ん？ 総合病院かな？

「さあ！ここよ！私が勤めている病院！」

そう言い、病院の中へ入った。

本当に・・・心療外科医なんだね・・・

見た目幼い姿なのに・・・僕もそうだけども・・・

そうしているうちに、託児室が見えてきた。

「さあーで、私はこれから仕事があるからさ！ 善吉ちゃんはこの
で遊んでいてね！」

瞳さんはそう言った。

実を言つと……この人が善吉君の母親らしい……

下手をすると僕と同じくらいの体格に近いのに……正直な感想です。

「つてあれ？ 僕は??？」

善吉ちゃんはどうしてことば？

「ああ！りゅういちくんはちょっとだけ一緒に来てくれるかしら？」
瞳さんが笑いながらそう言う。

善吉は寂しそうにしていたが。

直ぐに戻ってくるよと、伝えると嬉しそうに頷いて戻ってくるまで
遊具のパズルをして遊んでる！っと言い部屋へ入った。

「ちあー！いきましょー！」

そう言つと再び手を繋ぎ、託児室を後にした。

「あー!! そうだ・・・この時間も他に患者がいたんだ・・・」

瞳さんはしまった!ツといった表情でこちらを見る。

「あ!大丈夫ですよ! 僕、待ってます。だから割り込みとかなんてしませんので 他の患者さんを優先させてください。」

表情を読み取ったようにそう答えた。

「そっ・・・そう! ゴメンね!!直ぐに済むからね。」

瞳は・・・彼の異常性に驚きながらも直ぐに笑顔に戻り診察室へと向かった。

瞳
s i d e

「彼・・・いや 本当に2歳児なのかな・・・? 私が言うのもなん

「ただど……」

自分の容姿もねえ……

つて考えていた 苦笑

でも2歳児とは思えない程……

しつかりといろんなことを理解している……

万能タイプの異常能力かしら……??

暫く考えていたが……

「まあ……彼の事もただ今はそのどころじゃないもんね。」

そう……ここは異常と呼ばれる人たちが集まる病院……

言い方は悪いが……あまり1人の事だけを考えて入られないのだ。

だが……

「いよっし！ 今日もがんばっちゃおう！」

ぐつと力を入れた。

彼女は・・・1人1人に真剣に向き合っている。

当然という人もいるだろうが。

異常性をもった子供に真剣に向き合う事は生易しい事ではないのだ・
・

彼女も異常といわれていた子供の1人だった故も・・・あるのかも
しれない・・・

s i d e o u t

イスに座り・・・

前をじつと見て・・・

全く姿勢を崩さずに劉一は順番を待っていた。そこに・・・

1人の子供が近付いてきた・・・

女のコだった。

「おい！ 隣はあいておるか？」

初対面だったのだがそんなことは関係ない！といった感じだった。

「うん！大丈夫。僕1人だったから、いいよ。」

「そうか すまないな。」

彼女は笑顔を見せ座った。

「凄く・・・嬉しそうだね 君。」

女のこの顔が笑顔（わくわくした感じかな？）だった為 好奇心から話しかけていた。

「む！顔に出ていたか そうなのだ。もしかしたら自分が分からなかった事を教えてくれるかもしれないな。それでちょっぴりわくわくしていたんだ。」

「そうなんだ。」

なんだか・・・彼女の笑顔は素敵だと思った・・・

率直な感想なただけだ。

理由はよく分からなかったけど・・・

彼女と・・・話していると・・・

1つ隣にいた男の子が近付いてきた。

「『まつたく』 『なんのためだなんて』 『みんな大人の癖に』 『
的外れだよねえ』」

男の口はそう言つと・・・僕と女の口の前に立つた。

「『人間は無意味に生まれて』 『無関係に生きて』 『無価値に死ぬ
のに決まってるのにさ』 『君達もそう思うだろう?』 『えーつと
めだかちゃんにりゅういちくん?』」

そう彼が言つと・・・

めだかは 楽しそうな表情から一変した。

「.....」

僕は黙っていた。

多分・・・ちよつと前までの僕なら賛同していたかもしれない。

「『あれ・・・?君はそう思わないのかい?』 『絶望しているよう
に見えたけど?』」

くまがわ みそぎ・・・

彼の名札にはそう書かれていた。

「そうだね・・・多分ちよつと前の僕なら・・・君の考え方に賛同
したと思うよ。」

そう言う。

「『ってことは・・・今は違うんだね？』」

「うん。」

そう言うともみそぎは笑った。

「『うーん ちょっと遅かったんだね。僕は』 『もうちょっと早く君に合いたかったよ』 『でも、めだかちゃんは・・・？君もいつばいい人を終わらせてきたんだよね？』 『彼は残念だけど君はそれでいいと思うよ。』 『何をしてもいいんだ。』」

そう言うと・・・

「球磨川くーん 五番検査室に入ってくれろ？」

ナースのお姉さんから呼び出しが合った。

「『だって 世界には目標なんてなくて・・・人生には目的なんてないんだから』 『後りゆういちくん、僕に賛同できるのだったら』 『いつでも待ってるよ』 『じゃあまたね。』」

そう言うとき彼は大きなぬいぐるみと共に、

検査室へと入っていった。

「君・・・大丈夫かい？」

めだかはまだ考え事をしているのか表情は硬く・・・何も言わな

った。

恐らくは聞えていないのだろう。

自分にも・・・闇がある・・・

その耐性があるからこそ 彼の話しをそのまま聞けたのである。

常人なら・・・いや常人じゃなくても・・・彼のマイナス面を受け
たなら、心から動揺してしまうだろう。

いや・・・めだかの場合は・・・動揺というよりは・・・

彼の意見・・・を正しいと思ってしまったのだろう・・・

次に彼女も呼ばれ・・・

そのまま会話の1つもなく・・・

姿を消した。

第2箱 「プラスとマイナスの間の僕は・・・ゼロ？」（後書き）

ありがとうございました！

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう？分らないけど救われたよ」

よろしく願いします！

めだかボックスに関しては・・・
ちよつと短めに書いてます。

長く作るの特にオリジナル話は難しいですから・・・
でもガンバリマス！！

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう？分らないけど救われたよ」

そして暫く待ち・・・

「劉くん！ 二番検査室に入ってくれるかな？」

自分の番が来たようだ。

「はい。わかりました。」

そう言い、検査室へと入っていった。

相手は、瞳先生じゃなかったが、とりあえず。

いろいろと問診をしたりテストをしたり・・・

それは何時間にも及んだ。

疲れてはいないが・・・

「善吉君を待たせちゃったな・・・」

急いで託児室の方へと向かった。

そして中に入ると・・・

善吉は何やら座り込んで考え事をしていた。

「善吉君ゴメンね。遅くなつて」

後ろから声を掛ける。

「あつ！りゅうくん！んーん！大丈夫だよ！」

こつちを向くと笑顔で答えてくれた。

「何をしてるの？」

善吉に近付き問いかけると・・・

「これがどうやって解けなくてね・・・」

すこし残念そうな顔をする・・・

それは知恵の輪だった。

聊か2歳児には・・・いや幼児向けの知育玩具とはいえないと思つた。

「ああ・・・それは難しそうだね。善吉君は説明してあげたら嬉しい？それとも最後まで自分の力でやり遂げたい？」

およそ幼児に言う幼児の言葉ではなかったが・・・

そう聞いてみた。

「えー！どうやっても解けないんだ！解いてくれた方がうれしいよ」

善吉は迷わずそう答える。

「そっか、じゃあ貸してごらん。」

そうやって知恵の輪を受け取る。

そして解こうとした時、

テレビに目を向けてしまった。

託児室にはあまり似合わない内容の話した。

それを見ると……

カシヤン……

知恵の輪を落としてしまった。

「りゅ……りゅくん？どうしたの??」

驚いて善吉も近付いてくる。

「あ……あれ？ おかしいね。僕どうしたんだろう……」

涙が・・・次々出てきた。

それはテレビの内容のせいだ。

ある幸せの家族が・・・

突然不幸な事故にあい・・・

夫のみを残し、皆世界してしまうと言う・・・

なんでこのような内容の話が流されているのかは理解できない。

幼児には難しすぎる内容だろう。

だけど・・・

「りゅうくん！どこか痛いのか？大丈夫なの？？」

善吉も目に涙を浮かべながら心配してくれていた、

「善吉君・・・僕・・・とっても悲しい事があったんだ・・・」

幼児に話すことではない。そして幼児が話すような内容ではない。

明らかに傍から見れば異常だったが、そんなのは関係なく話す。

「大切な・・・ものをなくしちゃってね・・・ もう戻ってこないんだ・・・ もう・・・何もかも・・・終わりのような感じがするん・・・だ・・・」

涙を流していた。

「りゅうくん・・・」

善吉も・・・幼いなりに必死に慰めようとしてくれていた。

「彼がいったこと・・・正しかったのかな・・・？ この世に意味なんてないんだ・・・ こんなに悲しいんだ・・・」

そう呟く。

「まってよ！意味なんてないことないさ！」

善吉が叫ぶ。

「え？」

声量に驚いて善吉の方を向く。

「確かに・・・りゅうくんは悲しい事があつたんだよね・・・でも・・・それでも意味ないなんてことないよ！」

そう言い切る。

「なら・・・なんで僕は・・・こんなに悲しい気持ちになるのかな・

・ ・ ・ 苦しい気持ちに・・・」

劉一は・・・顔を俯いた。

「僕は君に会えて嬉しかったよ！お友達が増えたしね！意味がないなんて事は無いよ！君が・・・辛いのは・・・僕には分からないけど。それは、君はこれからきつと幸せになる為に！今があるんだと思うよ！そうだよ！きつと！きつと！今のことが吹き飛ばしちゃうような幸せが君を待ってるからだよ！」

・・・善吉の明るい・・・無邪気な笑顔は・・・

僕の心を溶かしてくれるようだ・・・

そつと・・・優しく・・・包み込むように・・・

「・・・ありがとう・・・善吉君・・・僕は・・・君と友達になれたことが・・・幸せだよ。」

心からそう思えたのだ。

そして善吉が頭を撫でてくれた。

不思議と・・・心が落ち着くような・・・

そんな感じがしていた。

暫くして

「さー！仕事終わったわ。善吉くん！りゅーくん！帰るよー！」

善吉と遊んでいると・・・

瞳さんが帰ってきた。

「お疲れ様です！」「おかえりー！！！」

善吉と劉一がそれぞれ言う。

「うん！ただいまあー！じゃあ 帰ろっか。」

そう言う・・・そのまま2人と手を繋ぐ。

「え・・・っと 僕は??？」

「ん？りゅーくんも一緒にね。」

笑顔でそう答えた。

その言葉を聞いて善吉は喜ぶ。

でも僕は・・・

「？」迷惑・・・じゃないですか？」

そう答えた。

すると・・・

「こぉーらー!」

瞳さんが軽く拳を作り頭を小突いた。

「子どもがなーに遠慮してるのよ!大丈夫!一人になんてさせるわけないでしょ?一緒に帰りましょ?」

そう言う・・・とても優しい笑顔で。

「そーだよ!りゅーくん!」

善吉も同様に優しい笑顔だった。

「あ・・・ありがとうございま・・・す・・・」

本日・・・

3度目の涙。

涙は嫌なものだとずっと思っていたけれど。

認識を改めよう・・・

そう感じた。

この涙は・・・

そう、

幸せの証なのだと感じた。

その日、3人は善吉 瞳 劉一の順で・・・

仲良く手を繋ぎ帰宅した。

・・・・・・

外から見ると・・・

親子にはみえないだろーな・・・・・・

苦笑

第3箱 「この世に意味は・・・どうなんだろう？分らないけど救われたよ」

ありがとうございました！

第4箱 「めだかちゃんが始まった」 (前書き)

よろしくお願いします!!

第4箱 「めだかちゃんが始まった」

劉一は・・・

暫く人吉家にご厄介になっていた。

善吉も友達がお泊りに来た！って感じで喜んでいる。

久しぶりに感じた・・・

家庭というものの暖かさだ・・・。

そして・・・病院の方は指示があった為 毎日のように通院した。

異常と言うことをストレートには言わないが、

劉一はそのことをしっかりと理解していると感じたのだろう。

しかし、僕の異常性を見ても、年齢的にも暫くは通院した方が良くと瞳さんが・・・瞳先生が判断したのだろう。

そうとは言わなかったけれど、大体想像がつく。

「病院は別に全然苦じゃないけど・・・同じような検査がどんどん続くのはさすがに嫌気が出てしまうなあ・・・動物じゃないんだし・・・」

そう思っていた。

その日はもう検査はすみ・・・善吉が待っている託児室の方へと向かっていた。

その道中。

周囲が急に騒がしくなってきた。

「おい！！ 13番 黒神めだかはどこに行った！？ 探せ！！」

「まだそんなに遠くに行っていないはずだ！！」

・・・・・・・・

どうやら誰かが逃げ出したみたいだ。

「黒神・・・めだかつて・・・ああこの間のあのコか・・・あの
みそぎくんと話をしてから表情が凄く硬くなっちゃってちよっと心
配してただけど・・・こんな事になっちゃったなんて。みそぎ
くんも退院してるみたいだし、」

心配だったけど、

とりあえず、搜索の方は先生方に任せ。

善吉を待たせている為、先に託児室の方へ向かった。

でも・・・

「帰りが遅いと心配かけちゃうから、善吉くんに説明してから、ち
よっと僕も探してみようかな。めだかちゃんを。　　とと・・・
ついた！」

そう言う間に託児室へと着き中へ入ると・・・

「む・・・？」

女のコがいた・・・

と言っか・・・ 入ったと同時に、睨まれちゃった・・・ グスン・

・

つて・・・

「あ！君は・・・」

中にいたのはめだかだった。

彼女は知恵の輪を解いていた。

入ってきたのが僕だと確認すると再び知恵の輪解きに戻った。

すると直ぐに知恵の輪を解いて見せた。

「ほら解けたぞ。」

そのまま善吉に渡す。

「うわあっ！すごいねきみ！りゅうくんにかとけないって思ったのに！！きみもすごいや！！ありがとっ！！」

善吉は喜んでいた。

「・・・礼には及ばない 私にとっては取るに足らないことだ。」

そう言っていたためだかの目は・・・

やはりあの時と同じだ・・・

「あっ！！りゅうくん！お帰りー！！」

善吉はめだかに解いてもらった事がよっぽど嬉しかったのか、弾けるまでの笑顔だった。

「うん！ただいま！それで めだかちゃんも、こんにちは。」

善吉に一言いい・・・そしてめだかにも挨拶した。

「ふむ・・・」

「あははは！」

めだかは愛想なくこちらを向いただけで、善吉は笑っていた。

すると善吉は何やらパズルを取り出し、

「さっきの続きでさっ！これも解いてみて！！」

めだかにパズルを差し出した。

すると・・・めだかは無言で受け取り・・・先ほどの知恵の輪より遙かに早く解く。

「わあああ！！！！すっ！！いやっ！！じゃあこれ！！！！」

善吉はさらに・・・ルービックキューブ・IQパズル・・・etc

と出して行く。

めだかはさらりさらりと解いていく。

「すごいね！君！」

ここにある知育玩具はあきらかに対象年齢が高いものだ・・・

それをあっさりと解いていくめだかを見ながらそういった。

「すごくなかない。」

唯その一言だけ言い、

パズル解きに戻る・・・

そのそっけなさに寂しさを僅かに覚えたが・・・

それを吹き飛ばすくらい、善吉はハイテンションだった。

めだかは・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・さきほども言ったがすごくなんかいい それにすごくたつて 何にもならない 私が生きている事に 私が生まれてきた事に 何の意味もないのだから、」

そう言った。

「それは違うよ！」

つい・・・声が大きくなってしまった。

君は・・・僕の・・・大切な人が憧れた存在だったから・・・そんな風に言わないで欲しかったし、やっぱり聞きたくなかった。

それに・・・

あの時の顔の方が今の顔よりずっと素敵だ。

めだかは突然の大声に一瞬だけ驚き、直ぐに表情を戻し こちらを見た。

「意味の無いことなんて無いよ！ねえ善吉君・・・」

すぐに善吉へと話を繋いだ。

善吉に言った訳は……

ほんのちょっと前まで……僕も世界なんて意味の無いもの……

こんなに苦しいのなら……と、

そう思っていたのだ。

そんな僕より善吉の声の方がきつと彼女の心に届くだろう……そう感じたんだ。

「うん！僕もこの世に意味のないことなんてないと思うけど？」

そうはつきり答えてくれた。

「……… だつたら 私に教えるがよいお前たち、私は一体何のために生まれてきた？」

ため息交じりでめだかが言った。

「……わからないかな？君と善吉君は初めてあつたんだよね？」

そう善吉に聞く。

「……」

「初対面の相手を・・・僕の初めての友達をこんなに笑顔にしてくれる君だもん！」

僕がそう言つと善吉が続けた。

「うん！きつときみは みんなを幸せにする為に生まれたんだよ！！ それにきつとりゆうくんも幸せにしてくれるよ！！」

笑顔で・・・今日一番の笑顔でそう答えた。

「！！！！！！」

めだかの表情が一気に変わる・・・

先ほどの表情が嘘の様だ・・・

「善吉君・・・」

僕も表情が変わつたと感じた。

それに・・・覚えててくれたんだね・・・

自然と・・・その場にいた全員・・・笑顔になっていた。

そして・・・めだかは。

「私は見知らぬ他人を幸せにする為に・・・生まれてきたんだ・・・」

そう自分に言い聞かせるように呟いていた。

今日この瞬間から・・・

箱庭学園 生徒会長 黒神めだか に繋がる人生がスタートしたの
だった。

第4箱 「めだかちゃんが始まった」 (後書き)

ありがとうございました！

第5箱 「2歳児にはちょっときついよお・・・」(前書き)

よろしく願いします!!

子供の時既にめだかちゃん知識の量は完成してたんだそうですね・
・

一般常識は分かってないみたいでしたが、遊園地とか野球とか・・・
苦笑

さてさて・・・この物語ではどうなるのか・・・

わかりません！ 苦笑

では!!

第5箱 「2歳児にはちょっときついよぉ・・・」

その後・・・暫くの間・・・

3人で遊んでいた。

めだかの表情はとても柔らかく・・・素晴らしかった。

時間がたつのを忘れるくらい・・・楽しい時間だった。

話をしてみると、今度入園が決まっている幼稚園が同じらしい。

その事に善吉は大喜び！

僕も笑っていた。

そしてめだかも同様に・・・笑っていた。

子供らしい笑顔だ。

暫くして、何かをして遊ぼう！とめだかが言い出した。

でもこの部屋の遊戯は全てめだかが制覇してしまったので・・・

めだかがどこからかオセロゲームを持ってきた。

「よし！劉一 私と勝負をするぞ！」

ビシッ！！ 凜ッ っと指を突きつけられた・・・ちよつと怖かったけど・・・苦笑

「良いよお！」

笑顔で承諾。

そしてオセロゲームがスタートした！

善吉はワクワク！って感じで見ている。

「ふむ。先攻後攻を決めるぞ。」

そう言っじゃけんをしようとする・・・が。

「めだかちゃん。僕白が好きなんだ！だから後攻で・・・ダメかな？」

そう言っど・・・

「む・・・ふむ。それならば構わないぞ！」

軽く承諾してくれた。

「ありがとうー！じゃあ・・・勝負！」

そう言って白熱したオセロゲームがスタートした・・・

・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・
・・・

「もう一度だ！」

めだかの声が響いた・・・

「ええつと・・・ また・・・？」

めだかちゃん・・・

6回目だよ・・・

「劉ー！貴様はすごい！私に凄いつてくれたが、貴様も凄いつ！だからもう一度だ！」

・・・何がだからなんだろう・・・ 苦笑

そう・・・ゲームに勝ってしまったのが始まりだった。

再戦に次ぐ再戦・・・

気がつけば6回戦・・・

僕の4勝2敗の戦績だ。

いやっ！ 違う。

僕が2回目の勝利の次からワザとめだかちゃんに勝ちを譲ったって
いたのがばれてしまっって・・・

それがめだかに更に火をつけたようだ・・・

「情けは無用だ！私は全力の貴様と戦いたい！」

そう言っって・・・気がつけば更に1勝・・・

そして6回戦が終了。

めだかは徐々に打つ手の鋭さを上げていく・・・

即ち 同じような手は二度通用しない。

回を重ねるごとにさらに白熱していく！！

だけど・・・

善吉はもうオネム状態に・・・

実際僕も眠い・・・

白熱したって・・・基本は2歳児の体だし・・・

ウトウトしてると・・・

「さあ！貴様の番だぞ！」

たたき起こされ・・・まではしないけど起こされる・・・

「はあ・・・い。」

さて・・・ここまできたらちょっと、しんどくなってきた・・・な・・・

でも万全じゃないとまためだかちゃんに言われるし・・・集中集中・・・

「あ！！」

そうだ！いい事、思いついた！

ワザと負けようとしたらめだかは分かっ
てしまっけど。

これなら・・・きっとバレないよね？

「ん？どうした？」

劉一の表情が変わった為めだかが聞いてみると・・・

「えへへ・・・いや、なんでもないよ！ほら、めだかちゃんの番だよ！」

不敵な顔をしてめだかに言った。

「ふふふ・・・望むところだ！」

その表情にめだかは喜び・・・

試合が再スタートする・・・

・・・

・・・

・・・

どちらも引かぬ接戦・・・

そして・・・

めだか・・・ 34個 劉一 30個

めだかの勝利だ。

「ふ・・・やっと貴様に勝てたな！」

「ははは！そうだね。」

めだかが喜んでいと・・・

「ここから声がしたんだな！！！」

「はいッ！！他の患者さんが言っていました！」

部屋の外が慌しくなってきた

「む・・・そうだったな・・・忘れていた。私は逃げていたんだ。まだ貴様のほうが勝率高かったのだが仕方あるまい・・・」

そう言うと立ち上がり劉一と善吉の方を向いた。

「今日は楽しかったぞ！劉一に善吉！では またな！」

善吉は眠ってしまったが・・・とりあえず僕は笑顔で手を振った。

そう言っつてめだかは手を上げ先生たちのほうへ向かった。

いろいろと注意を受けていたが彼らと遊んでいたと説明し、

とりあえず医者達は納得した。

如何に異常性アブノーマルがあつても子供・・・

遊びたいと言う気持ちは止められないだろう。

めだかは最後にもう一度世話になった劉一と善吉に礼を言おうと振り向くと・・・

「・・・・・・・・！！あれは・・・・・・・・」

めだかは・・・驚愕した。

その表情は初めて見る顔だった。

オセロゲームのボードを遠くから見ると・・・

それは・・・その配置はある模様になっていた。

近くにいたから気付かなかったのだろう。

それに白熱していた事もあるだろう。

それは・・・

「ははは・・・ オセロでパンダを作っていたのかい？」

「ふふふ・・・ かわいいわね！」

普段のめだかと違って、子どもらしいめだかを見てその場にいた大人たちは微笑んでいた。

そうオセロ盤を遠くから見ると一目瞭然だ。

模様がパンダのようになっていた。

めだかはというと・・・

「誘導されてたのだな・・・それに私は全く気付いてなかったのか・・・」

そう呟いていた。

そして、部屋の方を振り向いてみると・・・

善吉が眠っている劉一為一人片付けをしていた。

そして目があつ。

すると・・・

ニコッ・・・

笑顔でめだかを見つめた。

どうやらこの勝負の意図をめだかが理解したことに気付いたようだ。

その証拠にオセロ盤だけは片付けてなかった。

「ふふふ・・・劉一・・・面白いな・・・やはり。」

めだかも笑った。

不思議と・・・悔しさとかは全くなかった。

めだかは・・・超えるべき男が現れた事に純粹に喜んでいた。

単純なオセロゲームに過ぎないと傍からはそう思うかもしれない。

しかしそんな単純な遊びであっても、自分より上にいる者などにあつたことは無い。

そう・・・これまでは大人でさえそんな人に合つてなどはいなかったからだ。

自分より上の男が現れるなど...

心踊らないわけが無い。

それに私に「生きる意味」を教えてくれた善吉・・・
自分にとって かけがえのない者達との出会い・・・

「これからも楽しみにしておるぞ。 劉一！それに善吉もな！」

そう言つて託児室から出て行つた。

・・・
・・・
・・・

「最後の笑顔が何か怖いような気がしたけど・・・ 大丈夫だよね・・・
仕掛けは分かつてもらえたみたいだけど・・・」

最後の笑顔・・・

それにちよつと寒気が・・・ 走るような・・・

そんな感じが・・・

「ふああ・・・ むにゃ・・・ あ あれ・・・？めだかちゃんは
？」

そこで善吉が目を覚ました。

「あ！おはよ 善吉君、めだかちゃんなら帰つて行つたよ。看護婦
さん達に呼ばれてさ。」

「そーなんだ・・・寝なきゃよかったよ・・・」

善吉はちよつと残念そうにしていた。

「幼稚園も一緒なんだし、また合えるさ！」

落ち込んでいる善吉を慰める。

すると、直ぐに元気になった。

あれだけハイテンションだったからかな？ 苦笑

でも・・・うん。元気が一番だね。

そして・・・

「2人ともー 帰るよ!!！」

瞳先生が迎えに来た。

「あーはい！」

「うん。」

2人は託児室をでた。

第5箱 「2歳児にはちょっときついよ」・・・「(後書き)

ありがとうございました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8354x/>

めだかボックス ~From despair to hope ~

2011年10月28日16時03分発行